

民族文化、 華やかに伝える



盆を彫る貝澤眞男さん（平取町在住）

私と遺産

「独特の曲線美」 求める名工の血

二風谷に「北の工房つとむ」という木彫品店がある。店主の工芸家、貝澤徹さん（43）は今年2月、第35回北海道アイヌ伝統工芸展の伝統工芸品部門で知事賞を獲得した。受賞作品は、直径70センチの盆。モレウヤラムラムノカが複雑に絡みあっている。

貝澤さんは「名工」と呼ばれたウトレントクさんを曾祖父に、祖父も父も工芸家という環境で育った。高校卒業後は当然のこととして家業に就き、ペン皿を手はじめに木彫品を制作した。クマヤフクロウを彫るのと違い、アイヌ文様に心理的な抵抗があった。「20代まで『アイヌはいやだ。アイヌ文様は彫りたくない』と思っていた。アイヌ文様を最初に彫ったのは32歳ぐらい。そのころ、自分がアイヌであることに対応でき、受け流すことができた」という。

二風谷で客死した英国人医師・マンローのアイヌ工芸コレクションを今年初め、英国のエディンバラでじっくり見てきた。角盆、小刀（マキリ）、酒を神に捧げるはし（イクパスイ）などの文様に、貝澤さんは目をみはった。「マキリ一本で彫って仕上げた。それなのにラムラムノカは私の作品よりきめ細かい。独特の曲線も美しかった」。自分もその技術を会得したいと願う。